

橋本龍太郎氏（元内閣総理大臣）に聞く

「大平のおじさん」の思い出

―聞き手・川内一誠



第1次大平正芳内閣の閣僚記念写真。大平首相の真後ろが初入閣した橋本龍太郎厚相（首相官邸にて1978年12月8日）

大蔵官僚の輪講のメンバー

去 華 就 実

——橋本さんは第一次大平内閣で、厚生大臣として初入閣されましたが、大平さんとは政界に入るずっと以前から深いつながりがあった、とうかがっていますか……。

橋本 私にとって物心ついて、あれがいくつの時だったかわかりませんが、いつの間にか大平のおじさんというのが、記憶の中にあるのです。父（橋本龍伍元厚相・文相）の同僚の、当時大蔵省の若手・中堅クラスの官僚が、恵比寿にあった私の家にとときどき集まり、議論をしたり、お酒を飲んだりしていました。そのメンバーの一人が、大平さんだったのです。

——何人ぐらいでやっていたのですか。

橋本 一〇人ぐらいです。ガキ大将が愛知揆一さん（元外相）、あとは石原周夫さん（後の経済協力基金総裁）、下村治さん（池田首相の経済政策ブレーン）、佐藤エンベエさん（佐藤一郎元経企庁長官）、原純夫さん（後の東銀会長）、それに大平さんと父といったところです。まさに錚々たるメンバーです。あとで聞いたところによりますと、当番を決めて各人の家を廻り持ちで輪講をやっていたということ。始め二、三〇分、当番が発表をし、それをもとに丁々発止やり合うという形だったようです。最後はケインズだったと父が言っていました。

——どういうきっかけで集まったのでしょうか。

橋本 それが分からないんだ。年齢も入省年次もばらばらだし、主計（局）もいれば主税（局）もいる。どなたかが、これと思うのに声をかけて集められたのではないのでしょうか。もっと詳しく聞

「大平のおじさん」の思い出

いておけば良かった。

——大平さんは戦争末期、興亜院に向向していた時、農林省の伊東正義さん、満鉄の佐々木義武さん、鉄道省の磯崎勲さんと各省横断の「九賢会」というグループを作っていました。それよりだいぶ前からですね。

橋本 恵比寿にいたのは昭和一六年（一九四一年）から一八年（四三年）までです。夕方になるとおじさん達が見える。六時から八時ごろまで議論をして、そのあとご飯になる。よくすき焼きをしていましたよ。ところが、すき焼きになってお酒を飲み始めても議論が続いている。石原さんは大声を出し、下村さんは他人の家と自分の家の区別がつかないのか、僕や母にまでどなりまくるんです。大平先生はああいうおとなしいご性格の方だし、年次の上の人が多かったから、ちよつと距離をおいていましたね。こつちは、いい匂いがあるから、障子のすき間からそつとのぞいている。すると「坊や、おいでおいで、おじさんと一緒にすき焼きを食べよう」と誘ってくれて、膝の上に乗せて、すき焼きを食べさせてくれる。大平さんが酒の席で距離をおいたように見えたのは、酒の席での議論が好きでなかったことのほか、後から考えると大平さんだけが東京高商（一橋大）の出身なんだな。

——あとは皆、東大法学部出身ですか。

橋本 そう。東京帝国大学法学部。しかも（旧制）第一高等学校です。勉強会ではがんがんやりあつても、酒の席になると、もう一つとけこめないとところがあつたのかと思います。

——この会はいつまで続いたのですか。

橋本 当時の官僚というのは凄いなと思うんです。空襲のさ中でもやっていたんです。私の家は昭和

実 一八年に田園調布に移りました。田園調布の家は幸い焼け残ったため、父の当番ではなくても、わが家を使うことがあったようです。このころになると食料が乏しくなり、すき焼きどころでない。てんでに何かを持つてくる。その材料を使つて母が料理を作るんです。ある時、どなたかが干しうどんを持ってこられた。ところが断水で、うどんをゆでる水がない。母から言われて、その日の朝、入れ替えた防火用水の水を、私がそつと汲んできたことがありました。たしかその晩、空襲があったんですが、皆さん侃侃諤諤やっています。結局、交通がマヒして皆さんうちに泊まられました。

—そんなことがあったんですか。

陸軍の将校と喧嘩した大平さん

橋本 もう一つ強烈に覚えていることは、二〇年の四月、私と母が兵庫県の加住に疎開する時に、大阪に出張される大平さんとエンベエさんに京都まで送つてもらったことです。そしたら浜松で陸軍の将校と大平さんが、喧嘩をはじめた。その喧嘩がもとで汽車が一時間、止まってしまった。後で聞いたら、その将校が忘れ物をして汽車の発車をおくらせ、探しているうちに他人の荷物に手をかけたのを大平さんがとがめたのが原因ということらしいんです。京都に着いて乗り換える時、お二人に福知山線のホームまで送つていただき、窓から押しこんでもらった。僕にとっては、いいおじさんという印象でした。

—戦後になつてからは何かありませんか。

「大平のおじさん」の思い出

橋本 父が政治家になってから池田（勇人）大蔵大臣を私の家にご招待したことがあります。そのとき大平さんも、一緒に見えました。池田先生は袴をきちつとつけて着物でこられた。大平のおじさん、いやに静かだなと思った。

——大平さんが、もう秘書官ではなくて、政治家になってからですか。

橋本 多分、秘書官だったと思います。それから後しばらくは、大平先生との関係は中断するわけです。

——橋本さんがお父上の跡を継いで政界に出られてから、新たな関係ができるわけですね。初出馬の時、選挙で応援をしてもらったのですか。

大平外相に日韓問題で質問

橋本 ご挨拶には行きましたが、はじめは公認がいただけなかったから、応援していただくわけにはいかなかったのです。それに私が佐藤派でしたから、表立って応援するわけにはいかなかったでしょう。

一年生議員の時、大平先生は外務大臣でした。党の外交調査会で、大平先生に日韓問題について質問をしたんです。大平 金鐘泌会談のころです。納得できないところがあったものですから、生意気に大平先生に質問した。そしたら大平先生が立たれて、「エーいま質問された橋本龍太郎さんは、龍伍さんのご長男です。ちつちやい時を知っておりましたが、立派に育ったもんです」。皆さんげらげら笑っちゃうし、再質問する勇氣もない。それ以来、外交調査会には出ませんでした。

実 — 派閥が違つと、同じ自民党でも接触の機会は多くないのですね。

就 橋本 一年生、二年生のころは、昔のお父さんのお仲間ということで、暮れになると母が愛知先生や大平先生の所に、ご挨拶に行っていました。私も、それについて行くぐらいでした。

去 田中（角栄）幹事長の時、私の三度目の選挙に大平先生が旧倉敷市で応援を下さつた。その時は、とても嬉しかつたんです。ところが、児島市に入った瞬間から加藤六月さんの応援になつた。割り切れない思いがありましたよ。

— 幹部となると、私情をはさむわけにはいかないでしょう。次は、大平内閣への入閣となるわけですか。

橋本 いや、その前の大平さんが（自民党）総裁選に立候補された時、何力所か前座でお供をしました。宏池会だけでなく、田中派の若手もということで、喜んでお供をしました。初めのうちは遠慮がちだつた大平先生が、終盤になるとタフな演説をなさるようになった。お得意のフレーズで「醜男の大平正芳でございますが、笑顔の可愛い大平正芳と言われております」、これがもの凄く受けた。そのうち笑顔の可愛いが、笑顔の美しいになつた。「おじさん、あれはないですよ」と言つたら、「ばか言え。美しいでいいんだ」と言われた。心楽しかつたです。

— 入閣の話は、どういふふうに伝わつてくるのですか。

橋本 この時はね、正確には覚えてないんだけど、（田中）角さんの所から角さん自身ではなく榎本（敏夫）君（秘書）辺りから、「おやじが今度、入閣だ。多分、環境庁（長官）だと言っている」という話をいただいた。竹下さんから、その後、連絡をいただいた。

「大平のおじさん」の思い出

——そして官邸の呼び込みとなるわけですね。

橋本 呼ばれて官邸の玄関から入ったら、厚生（大臣）だと（新聞）記者さんから言われた。

——昔、すぎ焼きを食べさせてもらったおじさんから辞令を受けるとというのは、別の感懐があったのではないですか。

橋本 こちこちになつていて、そんな余裕はありませんよ。環境庁長官だと思つて行ったら厚生大臣だということで、エーと思つたくらいです。後になつていろいろ聞いてみると、斎藤邦（邦吉）さん（元厚相）が「龍太郎を使うのなら厚生がいい」と推してくれたのだそうです。

——厚生大臣時代、大平さんの思い出は何かありますか。

厚生省靈安室で立ちすくんでいた大平さん

橋本 どこかの戦域からたくさん収骨して、遺骨収集団が帰ってきた時のことです。千鳥が洲の戦段者墓苑にお納めするまで、厚生省の靈安室に安置されます。そして厚生省の職員が、お灯明とお線香を絶やさずにお守りしているのです。ところが誰も、お詣りをしてくれる人がいない。

閣議のあと、たまたま時間がおありになつたんでしょう、大平総理が「話していけよ」と言われたんです。その時、何気なく靈安室のことを訴えたんです。そうしたら、「そこへ行こう」とおっしゃるんです。役所に帰って厚生省の諸君にその話をしたら、ええつという感じなんで本気にしない。予算委員会の総括が終わったら、秘書官から本当に電話がかかってきて、「明日行きたい」ということ

実 です。もう躍り上がる感じでした。ご遺族の方も喜んだが、それよりも職員が喜んだ。

就 翌日、本当にきて下さって霊安室に入られた。大平先生は、ご遺骨がたくさんあるのにシヨックを
華 受けられたようでした。ものを言わないんだ。黙ってじつと頭を下げておられました。廊下に出てエ
去 レベーターのほうに歩き出したら、職員から一斉に拍手が起こり、「総理ありがとうございました」
という声が後ろからとんできました。エレベーターに乗ってから、ポツリと「作業は大変なんだろう。
職員に気をつけてくれと言ってくれよ」と一言、言われて帰られた、霊安室でじつと立ちすくんでい
た大平さんの姿が印象的でした。

一般消費税はいいと思った

——大平総理が一般消費税構想を打ち出した時、閣内にいてどういふふうに受け取っておられまし
たか。

橋本 私は一般消費税というのはいいなと思っていました。いいなとは思ったが、厚生省の守備範
囲の中で薬に消費税をかけてはいけなないと考えていました。そのほかについては、一般消費税は悪い
とは思っていませんでした。国会答弁の中でも一般消費税についての質問があれば、生命関連商品と
しての医薬品は、除外すべきだと答弁した覚えがあります。当時は、いまの消費税的に全部にかける
という発想はありませんでした。

——選挙前だからといって都合の悪いことは隠すというのは良くないというのが大平さんの哲学

「大平のおじさん」の思い出

で、国の財政事情を明らかにした上で一般消費税の導入を訴えたところに、大平総理の責任感、使命感がよく現われていると思うのですが……。

橋本 それは本当に感じました。閣議でまっ向から反対した閣僚もいたけれど、私は一般消費税の導入には賛成でした。その記憶があつたから海部（俊樹）内閣の大蔵大臣として、消費税をもう一度考えて下さいと言つたのも、自分が総理の立場で消費税を二パーセント上げると言つた時も、正面切つて私は言つてきました。特に宇野（宗佑）内閣の幹事長の時の参院選で、「リクルートはお詫びしますが、消費税についてはよく考えて下さい」と訴えましたが、大平先生はあの時こんな思いでおつしやつていたのだな、と思ひ出してました。

——あの時の大平さんの訴えを、選挙との関連でとらえてほしくなかつたのですね。

橋本 大平先生が、あのように正面切つて訴えて行かれる。それが聞き入れられるかどうかは別として、真剣に訴えているのには真剣に耳を傾けてほしいと思ひましたね。悲愴だつたもの。大平さんの訴えは……。

——まったくおっしゃる通りです。

橋本 あなたを前にして言つちやいけないが、メディアの人たちは感情的な受けとり方しかしなかつたもの。一所懸命わかつてくれ、という感じで大平さんが訴えていたのが忘れられないのです。あいう味のある政治家がいけないのは淋しいですね。

（平成二二年四月二〇日、橋本龍太郎事務所取材）

去 華 就 実

橋本龍太郎（はしもと・りゅうたろう） 一九三七年、東京生まれ。

慶応大学卒。サラリーマン生活の後、六三年二六歳で衆院選に出馬し初当選、以来当選一二回。七八年大平内閣で厚相に就任、親子二代の厚相として話題になる。党内有数の政策通として知られ、中曾根内閣の運輸相の時、行政改革の最大の課題だった国鉄分割、民営化を実現する。その後、自民党幹事長、政調会長、蔵相、通産相を歴任。九六年村山内閣の後を受けて首相に就任、行財政改革を中心課題とした。